

平成4年3月31日

米沢市文化財年報 No. 5

米沢市教育委員会



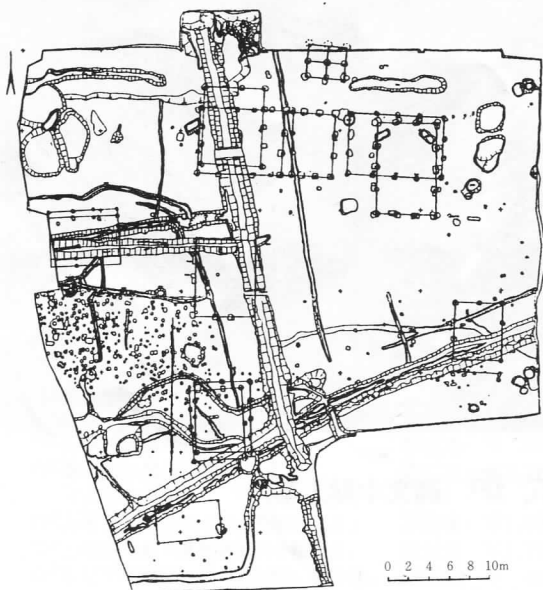
塔ノ原遺跡複式炉 (縄文中期末葉)

大浦 C 遺跡

調査期間：平成3年4月22日～7月5日

個人の圃場整備に伴って、昨年と今年度の2ヶ年にわたって緊急に発掘調査を行ったもので、本年は南半分にあたる約1,100㎡について調査を実施した。

今年度の調査で確認された遺構は、掘立柱建物跡5棟と溝状遺構16基、土壌9基、池状落ち込み遺構3基、井戸1基、それに多数の柱穴群である。これらの遺構は概ね奈良期に属するもの、中世期に属するもの、近世に属するものの三時期に区分することができ、昨年度の調査で確認された遺構の概要とほぼ同様であった。この中で重要なものとしては、奈良期に属する掘立柱建物跡4棟があり、建物に伴う柱穴の掘方は30～55cmの円形及び楕円形で、20cm前後の柱痕跡（アタリ）を示している。また、掘立柱建物跡の西側に15m程伸びているのが確認された小柱穴は、溝状の掘方を伴っており、隣接する大浦B遺跡で確認された柵列と類似していることから、同様な施設であったと考えられる。中世期のものとしては、昨年確認した大溝が今回の調査区にも伸びているのが確かめられ、しかも、調査区の南寄りに3mの空間を有しているのがわかった。これらの遺構は城館跡に伴う掘跡と虎口施設と考えられ、堀跡の西側に中世



大浦C遺跡 遺構全体図



平成3年度調査区遺構全景

の遺構が集中していることから、堀の西側が館内であったと判断することができる。

遺物は整理箱で5箱分出土し、昨年よりは少ないものの、奈良期の布目瓦や堀跡から出土した下駄・漆器等の木製品など、貴重な資料となりうる遺物が含まれている。

2ヶ年にわたる調査の成果から本遺跡の性格が明らかになりつつあるが、主に奈良期について考えてみると、遺構の切り合い関係から二時期に大別される。年代的には、I期が8世紀中葉、II期が8世紀後半となる。郡衙と推定される大浦B遺跡と比較すれば、本遺跡は小規模ではあるが、柵列で区画され、建物が整然と配置されている点から類似性があり、郡衙に密接な係りを有する外部施設と考えられる。墨書土器等の出土がなく明確ではないため、その解明については今後の課題である。



奈良時代の上浅川遺跡想像図

米沢城東二の丸跡

調査期間：平成3年5月28日～9月20日

今回の調査は、観光開発事業に伴う緊急発掘調査で、調査面積約3000㎡が対象である。

検出された遺構には、掘立柱建物跡、礎石建物跡、溝・堀跡、土塹、洗い場状遺構、給水施設、トイレ跡・二の丸堀跡などがある。

検出された遺構は中世・近世・近代の3時期に大別される。その中で主体を占めるのが中世期である。KY42(水堀)で区画された南側にかけて数期にわたって33棟の掘立柱建物跡と礎石建物跡群が確認されている。中世期はKY42の薬研堀で区画された範囲に約8時期にわたる建物群がある。年代はⅠ期が14世紀初頭、最後のⅧ期が15世紀後半頃とKY42の堆積層内出土遺物で推測される。近世の遺構として代表されるものとして給水施設がある。桶の平面形は円形を呈しており直径約90cm、深さ約150cmある。桶の上・下部には竹水管を接続し、桶と桶を繋いでいる。桶の側には水位調整用の空気孔や調整落し板があり、当時の水道用技法を考える上で極めて重要なものである。

遺物も3期に分けられる。Ⅰ期は中世の遺物で、緑釉菊花紋(小皿)、内耳取手鍋・香炉・鉢(戸長里窯)・大甕(越前)などがある。Ⅱ期は近世の火鉢・すり鉢・甲冑などがあり、中でも特に注目される

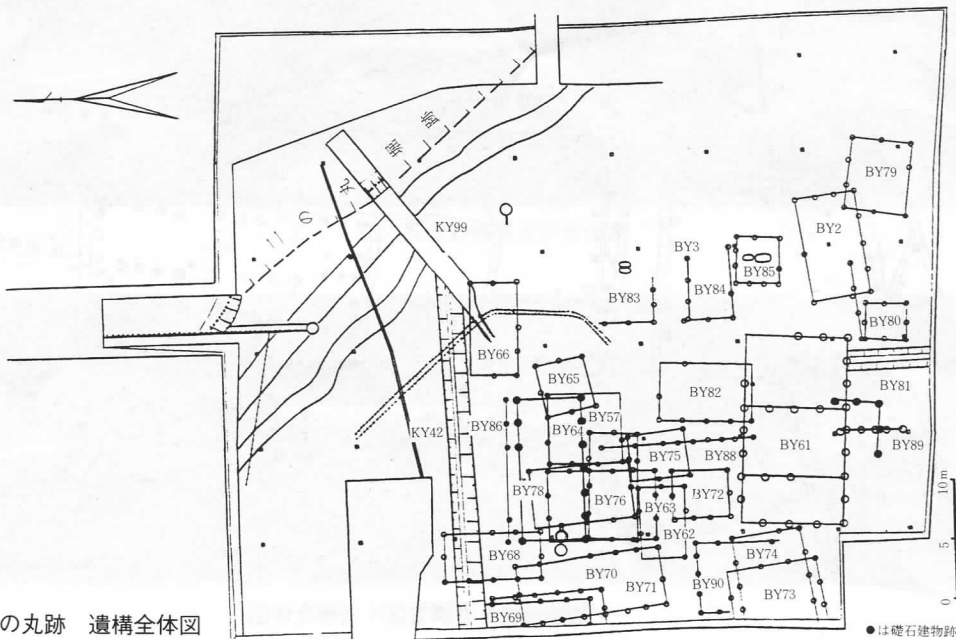


米沢城東二の丸跡 遺構全景

ものとして大型手焙り、香炉(岸窯)、小皿(志野)の一級品も含まれている。

米沢城の本格的な発掘調査は今回が初めてであり、建物跡33棟を含め、多数の遺構や遺物が検出されたのは上述のとおりである。他にも建物跡と想定される柱穴が多数存在しているが、近世の遺構に壊されていることもあって、建物群の全体的な配置関係を把握するには至らなかった。

しかし、Ⅳ・Ⅴ期などの建物群から推測すると、調査範囲内には常に5～7棟の建物が建っていた可能性がある。また、御城下絵図によれば二の丸堀は時代によって変容しているものの、今回の調査により、その存在は明らかなものとなった。



米沢城東二の丸跡 遺構全体図

一ノ坂遺跡

調査期間：平成3年11月5日～11月28日

平成2年度から国庫補助を受け、3ヶ年計画で調査を実施しているもので、今年度はその2年目にあたり、調査は5度を数えている。

今回の調査区は、1次調査で検出された大型住居跡の南東側にあたり、昨年度実施した4次東調査区の南側に隣接（一部重複）する。調査面積は160㎡である。

検出された遺構は竪穴住居跡8棟と土壇2基で、竪穴住居跡はお互いに重複して構築されており、昨年度検出された住居跡群と同様な状況であった。住居跡の形状は、方形または長方形を示し、壁が直角に近い立ち上がりを示すものが多かった。深さは18～50cmと比較的深く掘り込まれており、柱穴跡はすべての住居跡の壁直下に配されていた。本遺跡では、1次調査の際に主軸長が43.5mを測る、長楕円形のロングハウスが確認されているが、今回確認された住居跡群の中で最も規模の大きいHY7も、主軸長が13.6mを測り、ロングハウスの仲間として分類されるものである。出土した遺物は整理箱で約5箱分であり、これまでの調査区と比較すれば少なく、1次調査で認められたチップや炭化物は出土しなかった。土器は住居跡覆土からの出土が大半であり、復元可能な土器は1点



一ノ坂遺跡第5次調査区遺構全景

もなく、時期別では縄文前期初頭で占められる。石器についても土器と同様、住居跡からの出土で、石匙・石錐を中心に総計41点であった。

本遺跡は河岸段丘の第2及び第3段丘上を利用して集落を構成しており、これまでの調査から北西方向にロングハウス、東方斜面に土壇群、そして東方斜面下に竪穴住居跡群が重複して配されているのが確認されており、次第に一ノ坂遺跡の集落構成が解明されつつある。

今後は南方向にさらに延びることが予想される竪穴住居跡群、さらに斜面における土壇の配置、また大型住居跡北方の遺構確認が調査課題である。



一ノ坂遺跡第5次調査区 遺構全体図

指定文化財紹介

市 指 定

〈刀 銘 於江府長運齋綱俊作之〉

〈脇指 銘 於江府長運齋綱俊〉

指定年月日：平成4年3月31日

指定の種類：有形文化財（工芸品）

指定物件名：刀 銘 於江府長運齋綱俊作之 一振
脇指 銘 於江府長運齋綱俊 一振

指定物件の所在：米沢市丸の内1-4-13
米沢市立上杉博物館

指定物件の概要

〈刀〉 法量：長72匁、友2.75匁、
元幅3.2匁、先幅2.2匁、
元重0.7匁、先重0.5匁、
茎長18.75匁、茎反0.1匁

形状：鑄造 庵棟

〈脇差〉 法量：長50.4匁、反14匁、
元幅3匁、先幅2.2匁、
元重0.7匁、先重0.5匁、
茎長14匁、茎反僅か

形状：鑄造 庵棟

本刀剣は、郷土の刀工である初代綱俊（加藤長運齋綱俊、本名加藤八郎 1797年頃～1863年）が嘉永元年（1848年）に作刀し、財団法人日本美術刀剣保存協会が甲種特別貴重刀剣と認定した美術的に価値の高いものである。

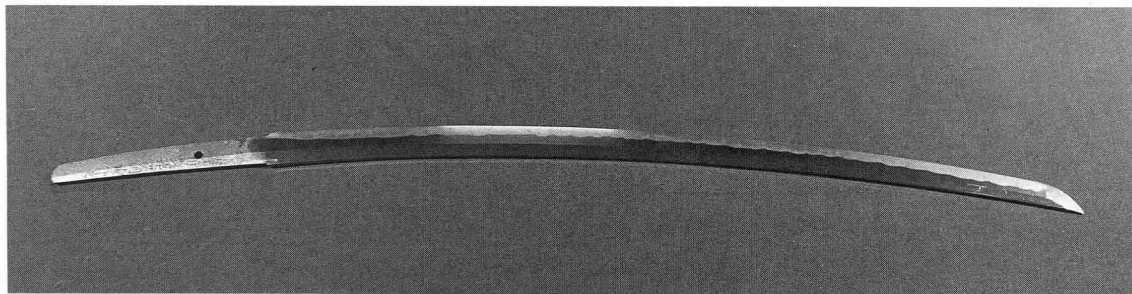
初代綱俊は、備前伝を最も得意とした刀工であり、刀銘からみても綱俊の代表作であることをうかがい知ることができる。

すなわち、大小に「嘉永元年十月」の銘が刻まれており、共づくりの作刀であること、また、「刀」に太々土壇払いの截断名を入れたことは、初代綱俊が自信をもって献刀した裏打ちになるものである。特に、江戸時代における郷土刀工の代表的存在である初代綱俊が鍛刀したものであるから、江戸時代の米沢藩における刀鍛冶の存在と技術を知る上で極めて貴重な資料である。

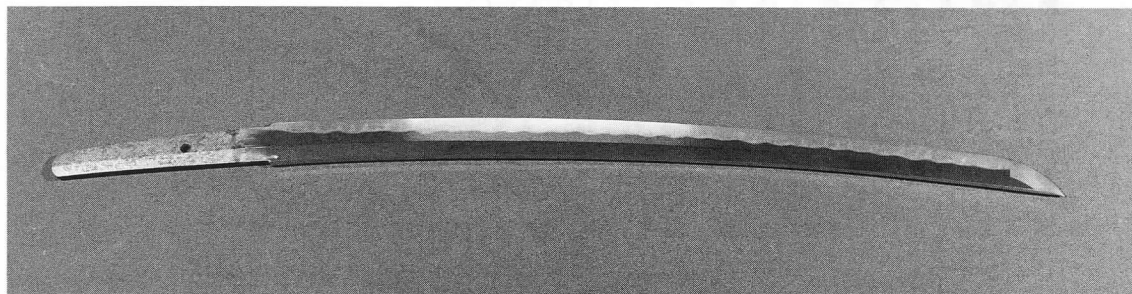
特徴として、刀は、上寸の長さで中反り深く堂々たる姿であり、嘉永元年（1848年）十月に大小揃いとして同時に作刀したのは珍しく貴重である。

刀の茎に刻した「太々土壇拂」の截断銘は、初代綱俊が鍛刀したもののなかで業物で快心の作であることから、後刻したと思われる。

白鞘には、優作の大小と鑑定された佐藤寒山先生の自書がある。



刀 銘 於江府長運齋綱俊作之



脇指 銘 於江府長運齋綱俊

— 市 指 定 —

〈漆 紙 文 書〉

指定年月日：平成4年3月31日
 指定の種類：有形文化財（考古資料）
 指定物件名：「漆紙文書」 1点
 指定物件の所在：米沢市万世町桑山200番地
 米沢市埋蔵文化財資料室

〔指定物件の概要〕

法 量：最大径18cm、最大厚2.5mm

この漆紙文書は、平成元年12月、本市中田町地内の大浦b遺跡における埋蔵文化財緊急発掘調査の際、地表下約1.5mの土壌底面から出土したものである。

漆紙文書は、古代律令制時代に、官衙において使用された公文書の反故紙が当時の漆職人に払い下げられ、それを漆容器の「蓋紙」として再利用したものと考えられており、漆の付着した部分が、ほぼ円形状に残存したものである。

この漆紙文書は、「曆」に日々の吉凶や禍福などの曆注を記載した「具注曆」で、国立歴史民俗博物館での調査により、延暦23年（西暦804年）12月18日から同月28日までのものと鑑定された。

古代における「具注曆」は、毎年、中央の陰陽寮で作成され、それを諸国から出向いて書写し、



漆紙文書 赤外線テレビ写真

その国府に備えられたものを、さらに書写して国府内の諸機関や国分寺、郡衙などにも備えられた。

8、9世紀の「具注曆」は、全国で11例発見されており、東北地方ではこれが5例目、県内では初めての発見となる。

さらに、これまで発見された「漆紙文書」の中では、欠失部分が少なく、最も良好な遺存状態で出土したものといわれる。

このようなことから、この「漆紙文書」は、全国でも数少ない考古資料として極めて価値が高く、置賜地方の政治・文化や東北史、さらには古代の社会制度を知る上で、極めて貴重な資料といえる。

— 市 指 定 —

〈塔ノ原遺跡出土石製品〉

指定年月日：平成4年3月31日
 指定の種類：有形文化財（考古資料）
 指定物件の所在：米沢市万世町桑山200番地
 米沢市埋蔵文化財資料室

1. 刻線画石製品 1点

〔指定物件の概要〕

法 量：最大幅9.5cm、短径6cm、
 最大厚10mm

この石製品は、平成3年4月、本市小野川町地内の塔ノ原遺跡における埋蔵文化財緊急発掘調査

<p>〔脱行〕</p> <p>廿八日己巳未定 立春正月節 東風解凍</p> <p>廿七日戊辰木平 候小過外大歳位</p> <p>廿六日丁卯火満 大歳前天恩復裁衣買納</p> <p>廿五日景寅火除 大小歳前天恩往亡</p> <p>廿四日乙丑金建 候小過内 大小歳前天恩拜官結婚</p> <p>廿三日甲子金閉 大小歳前 大小歳前天恩天赦婦忌血祠祀</p> <p>廿二日癸亥水開 沐浴堅澤 陰錯重厭</p> <p>廿一日壬戌水取 沐浴 大歳位漁獵種時吉</p> <p>十九日庚申木危 沐浴臨 大歳位月徳祠祀壞垣破屋伐樹解除</p> <p>廿日辛酉木成 沐浴 大歳位謝土祀并解除除服吉</p> <p>十八日己未火破 鷹疾鳥 大歳位</p>	<p>〔復原〕</p> <p>十八日己未火破 鷹疾鳥 大歳位</p> <p>十九日庚申木危 沐浴臨 大歳位月徳祠祀壞垣破屋伐樹解除</p> <p>廿日辛酉木成 沐浴 大歳位謝土祀并解除除服吉</p> <p>廿一日壬戌水取 沐浴 大歳位漁獵種時吉</p> <p>廿二日癸亥水開 沐浴堅澤 陰錯重厭</p> <p>廿三日甲子金閉 沐浴 大小歳前天恩天赦婦忌血祠祀</p> <p>廿四日乙丑金建 沐浴 候小過内 大小歳前天恩拜官結婚</p> <p>廿五日景寅火除 候小過外 大小歳前天恩往亡</p> <p>廿六日丁卯火満 候小過内 大小歳前天恩復裁衣買納</p> <p>廿七日戊辰木平 候小過外 大歳前天恩復裁衣買納</p> <p>廿八日己巳未定 立春正月節 東風解凍 候小過外 大歳前天恩復裁衣買納</p>
---	---

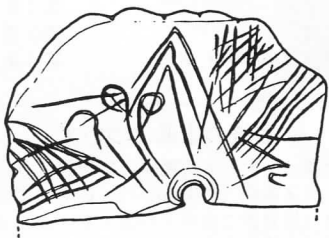
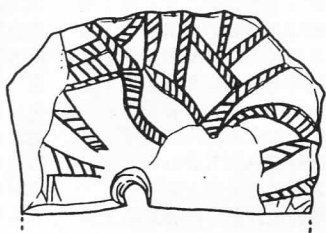
具注曆 復原文

の際、地表下約30cmの縄文前期末葉の文化層から出土したものである。

烏川流域の粘板岩を用いて制作されたもので、表面には鋭利な工具で施した文様があり、裏面には刻線画が描かれている。

形状は、約半分が失われているが、隅丸方形と推測され、中央部に直径約6mmの穿孔があり、縁辺には鋸歯状の刻みがみられる。文様は、2本単位の線を、円弧文、山形文、菱文で配列・構成し、その2本線の間を連続斜線で埋めている。この文様は、関東地方の縄文前期の形式である諸磯B式に極めて類似しているが、これまでの出土例では土器に限られており、この種の文様をもつ石製品は、縄文前期では例がない。

また、刻線画は、原始風景画と考えられ、構図から推測すると、出土地点周辺の風景を描いたとも考えられる。線刻原始絵画の発見例は、長野県の尖石遺跡や、愛媛県の上黒岩遺跡など、数例が報告されているが、これらは全て自然礫に線刻したものであり、石製品としてのものは、他に類例がない。



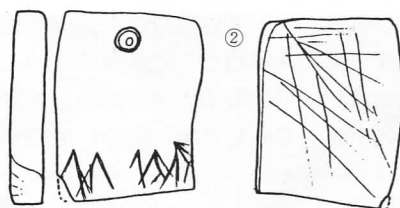
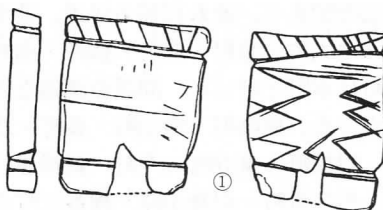
刻線画石製品 スケッチ

2. 琴状石製品 2点

〔指定物件の概要〕

法 量：①最大幅5.4cm、最大長さ6.5cm
最大厚1.3cm

②最大幅5.1cm、最大長さ6.9cm
最大厚1.2cm



琴状石製品 スケッチ

この石製品は、平成3年5月、前述の「刻線画石製品」が出土したのと同じ発掘調査現場において、縄文前期末葉の竪穴住居跡が集中している地表下約40cmの遺構確認面から出土したものである。

2点とも長方形に研磨した粘板岩を用いて制作されたもので、そのうちの1点は、上下に2本の凹線を加えて区画し、上端の間には斜線による刻みを施しているのが特徴で、表面の両側端には交差する鋸歯状文が描かれている。裏面にも中央寄りに細線が刻まれているが、何を描いているのかは不明である。

もう1点は、表面の上部に直径約9mmの未貫通の円孔があり、下部に変形の鋸歯状文が描かれている。裏面には、細かい刻線が数本交差しているが、何を表現したのか不明である。

この2点の石製品は、前者の形状から、「琴状石製品」と呼称しているが、同様の形態の石製品は他に類例がない。

また、縄文時代の後期から晩期、特に晩期には、東北地方を中心に、「岩版」と呼ばれる石製品に文様を施した祭祀用品が数多く出土しているが、この石製品のように縄文時代前期のものは、これまで発見例がない。

米沢の職人展

米沢が近世城下町として整備されるのは、上杉氏が会津から転封となった慶長6年(1601)以後のことである。それ以前の伊達、蒲生時代からあった大町・東町・立町・柳町・南町・新町（おほだち）の6町は本町と呼ばれ、問屋や酒造などの大店が多かった。免許町・鍛冶町・長町・北町・銅屋町・紺屋町・東寺町・今町・新桶屋町・鉄砲屋町・馬口労町・川井小路・地番匠町の13町は脇町と称され、職人たちが多く住んだ。元和元年(1615)の大坂夏の陣以後、国内が平穏になるに伴って、武器職人の仕事は必然的に激減した。米沢藩では鉄砲鍛冶の凋落が最も著しかった。時代が下って弘化3年(1846)、米織が藩最大の

産業として定着した時期であるが、「機織」「賃織」はわずかに3戸であり、機織が武士の独占であったことを証明している。寛文4年(1664)、米沢藩が30万石から15万石に減封されるに及び、藩士、藩氏の生活は困窮を極めた。織物も筆結も上杉鷹山の奨励によるものと伝えられるが、武士の内職として産出されたものである。

本職人展では、数ある諸職のうち、桶・筆・下駄について製作の工程を区切って、使用される道具とともに展示した。道具も工程をあらわす用語も専門的であり、普通目にしないものであるため、大変新鮮な感動を呼んだようである。また、年配の方々には懐しい展覧会となった。

歴史の変遷の中で職人、職人町、そこから生み出されるものも変化するが、ひとときその勢いの激しい現代において、伝統的手職が失われようとしている。

報告書紹介

米沢市教育委員会では、埋蔵文化財及び一般文化財を年次毎に調査し、報告書を作成しておりますので紹介します。

〈埋蔵文化財調査報告書〉

- 『普門院遺跡外3遺跡発掘調査概報』 第1集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅰ』 第2集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅱ』 第3集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅲ』 第4集 在庫なし
- 『比丘尼平遺跡調査報告書』概報 第5集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 第6集 ￥4,000
(水神前・柿の木・ニタ俣B各遺跡)
- 『笹原遺跡発掘調査報告書』 第7集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 第8集 ￥4,950
(八幡堂・ニタ俣A各遺跡)
- 『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』 第9集 在庫なし
- 『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』 第10集 在庫なし
- 『左沢遺跡発掘調査報告書』 第11集 ￥1,500
- 『法将寺遺跡発掘調査報告書』 第12集 ￥1,040
- 『白旗遺跡発掘調査報告書』 第13集 ￥500
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書 第1・2次』 第14集 在庫なし
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書 第3次』 第15集 ￥6,000
- 『石垣町遺跡発掘調査報告書』 第16集 ￥800
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 第17集 ￥3,700
(大清水遺跡)
- 『大浦A・C遺跡発掘調査報告書』 第18集 ￥1,900
- 『三の丸・生蓮寺遺跡発掘調査報告書』 第19集 ￥1,170
- 『木和田館跡第1次発掘調査報告書』 第20集 ￥400
- 『比丘尼平遺跡発掘調査報告書』 第21集 ￥950
- 『矢子大日向遺跡発掘調査報告書』 第22集 在庫なし

- 『遺跡詳細分布調査報告書』第1集 第23集 ￥2,200
- 『笹籬C遺跡第1次発掘調査報告書』 第24集 在庫なし
- 『遺跡詳細分布調査報告書』第2集 第25集 ￥1,700
- 『覚範寺第1次・第2次発掘調査報告書』 第26集 ￥1,510
- 『遺跡詳細分布調査報告書』第3集 第27集 ￥510
- 『遺跡詳細分布調査報告書』第4集 第28集 ￥1,540
- 『大浦B遺跡発掘調査概報』第1集 第29集 在庫なし
- 『一ノ坂遺跡発掘調査概報』第1集 第30集 在庫なし
- 『寶領塚古墳第1次調査報告書』 第31集 在庫なし
- 『遺跡詳細分布調査報告書』第5集 第32集 刊行予定
- 『大浦C遺跡発掘調査報告書』 第33集 刊行予定
- 『上新田A遺跡発掘調査報告書』 第34集 刊行予定
- 『一ノ坂遺跡発掘調査概報』第2集 第35集 刊行予定

〈一般文化財調査報告書〉

- 『米沢の民家』 第1集 在庫なし
- 『米沢の仏像』 第2集 在庫なし
- 『米沢の神社・小祠・石造物』 第3集 ￥1,930

表紙の土偶について

この土偶は、米沢市八幡原No.30遺跡より出土したもので、縄文後期(約3800年前)のものです。

顔と腕の部分がこわれていますが、ふくよかな胸乳や腹部は女性をあらわしています。

県内には縄文時代の土偶がたくさん出土していますがこの時期のは少なく、縄文後期を代表するものといつてよいでしょう。

昭和56年12月17日米沢市指定文化財となる。

発行 米沢市教育委員会
〒992 米沢市金池五丁目2-25
(担当 文化課文化財係)
TEL 0238-22-5111